

未来の羅臼の発展に貢献したいという心を育む

羅臼町立春松小学校 校長 藤吉桂子

担当者 瀬川 航平

1 本校のESDの特徴

本校は、「ふるさとに誇りをもち、進んでかかわる子」を学校教育目標として、ESDを「豊かな関わりを通して学習する理念と方法」と捉え、ESDの実践を通して「自立の力と共生の心を育む」力の育成を目標とした。

具体的には、海洋、環境、防災、生物多様性を柱に、①知床の海に関わる活動、②環境に係わる学習、③地震と津波に係わる学習、④外来種と熊に係わる学習を行った。

2 活動・全体計画

①知床の海に係わる学習

水産業が盛んな地域である羅臼町の水産業について学ぶため、市場や水産加工場見学などの校外学習を行うとともに、漁業に携わる漁業協同組合青年部の協力を得て、羅臼で獲れる魚介類のさばき方を教えてもらったり、創作料理を一緒に作ったりする活動を通して水産自然や自然環境の守りながら漁業を営む人々の苦勞や願いを知るとともに、これからの水産業の在り方を考えた。

②環境に係わる活動

自分たちが使う水道水の用途や量、送られてくる経路、水源を確保するための取組につい

て浄水場の見学をとおして学ぶとともに、使った後の水のゆくえを調べ浄化槽のしくみにより再利用され、施設で処理されていることを企業や外部講師の協力を得て学んだ。

③地震と津波に係わる学習

幼稚園や地域の方々と合同避難訓練を実施するとともに、6年生を対象に北海道教育大学



釧路校の境教授とその研究室学生の協力を得て、地震により発生した津波についての学習を行った。この学習は「国後島があれば、津波の被害はないのだろうか」のテーマの下、大がかりな津波発生実験装置を使い、「普通の波」と「津波の

波」の違いについて考え、地震が発生した際の自分がとるべき行動について学んだ。

④外来種と熊に係わる学習

世界自然遺産の地に住む子どもたちが「自然豊かな羅臼」の価値について考え、それを守り維持する重要性について学ぶため、「知床財団」の協力を得て、日本の固有種とは異なる外来生物について学ぶ「ハチの学習」やヒグマの生息地であることを踏まえ、熊に遭遇した時の対処方法、熊を取り巻く生態環境について学んだ。



3 活動事例

■ 1・2年生 【知床学（海洋教育）「めざせいきものはかせ」】

羅臼町郷土資料館周辺の前庭や裏山、前浜を活動場所として、実際に川に入って生き物を探したり、虫を捕まえたりするなどの活動を通して、自然の素晴らしさや生命の大切さを学ぶ活動を実施する。

■ 2年生 【知床学（海洋教育）】

国語「さけがおおきくなるまで」と関連付けながら漁業関係者の協力を得て、サケの稚魚の放流体験をとおして豊かな海を持続する大切さについて学ぶ活動を実施する。

■ 3年生 【知床学（海洋教育）「ふるさと探検隊」】

羅臼町の基幹産業である「漁業の仕事」について調べる社会科の学習と関連付けながら実際に働いている人にインタビューするなど情報収集の方法について学ぶ活動を行う。

■ 4年生 【知床学（海洋教育）「羅臼の魅力再発見」社会「地域で受けつがれてきたのもの」】

羅臼の魅力について話し合ったり、社会「地域で受けつがれてきたのもの」と関連付けながら地域行事「こんぶフェスタ」への参画、地域や観光客からアンケート調査などの学習をとおして学んだことを



羅臼の魅力としてユネスコスクール発表会で発信する。

■ 5年生 【知床学（海洋教育）「自然とともに生きる」】

漁業協同組合、地元の漁業者などを講師に招き、昆布に関する学習、サケ（鮭）学習を調

理などの体験学習を通して学ぶ活動を実施するとともに国語「自然とともに生きる」と関連付けながら知床の自然の価値を理解し、将来にわたり知床の自然の関わり方について考える学習を実施する。

■ 6年生【知床学（海洋教育）自分の考えを発信しよう】



漁師をはじめとした水産業はもとより、様々な職種の職業人を講師に招き、仕事に関する講話や児童との対話を通して、身のまわりの仕事や環境への関心を高める学習を実施する。また、

これまでの海洋教育で学んだことを踏まえ、自分たちの考えを地域に発信する。

4 成果と課題

多様な他者と児童が様々な体験を通じた学習を展開することにより、ふるさと羅臼をより深く理解し、郷土に対する誇りや愛着を持ち、さらには未来の羅臼の発展に貢献したいという心を育むことができた。

羅臼町立春松小学校 メールアドレス

shunshou@seagreen.ocn.ne.jp